
ゼロの使い魔～ルイズの双子の兄貴に転生しました～

神雷鳳凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜ルイズの双子の兄貴に転生しました〜

【Nコード】

N5977Z

【作者名】

神雷鳳凰

【あらすじ】

あるとき村上怜生は、上から落ちてきた鉄骨につぶされ死んでしまった…

そして白い部屋に飛ばされたと思ったら自称神が俺に転生のチャンスを与えて、俺はルイズの双子の兄貴に転生したのだった……

プロローグ

俺の名前は村上^{むらかみ}怜生^{れお}皆からはドジと言われてるが、何もないところ
こけたりするののどこがドジなんだ…

それがドジです

なんかむかつく電波が…おっとメタ発言だった

とはいえ今僕はなんと……

何もない真つつつつつ白い部屋にいます

壁があるかすら疑えてくる……

「あなたは誰ですか？」

そんなこんな考えていると1人の…幼女？が立っていた、まるでと
あるに出てくる子萌先生のような人だ

「俺は怜生です」

「…思い出しました、あなた私が間違えて殺してしまったh」「くた
ばれえええ」「ガフツ！？！？！？！？」

ドサリ……………

やばい、蹴っちまったじゃあまずたたき起こさないと

「びっくりしたです！」

「す、すまん…」

「まあいいです、さてあなたにはこれから転生してもらいたいんで

す」

「転生？あの伝説の死人を別世界へ送る儀式？」

「ま、まあそうですね」

「じゃあどこに行けばいいんですか？」

「行けばわかりますよ」

「なら、一応能力ください」

「いいですよ、何がいいですか？」

「じゃあ、FAIRYTAILの魔法全般と、モンハンの武器の太刀の強いやつ一式とジェットブーツの死ぬ気の炎式ので」

「はい、では容姿はどうしますか？」

「じゃあ、髪を桜色にして、破れないマントをください」

「ではそこに立つてください……それでは……この者に生を与えよ……ザオラル……！」

そういわれると俺は目の前が真っ白になった

第1話 ルイズの兄はチート級

さて俺は今ゼ口魔の世界に転生したところです、え？なんでわかったかって？それりゃあ簡単さ、それは…

「さあライル、ルイズ、寝ましょうね」

「ばーぶぶ《はいよ》」

「Zzzz…《寝ている》」

こういうこった、そう俺はどういう事かルイズの双子の兄貴に転生したらしい、ん？何故わかったかって…そんなこたあ、決まってるだろ！勘だ！！！！！！

この主人公はバカです

またむかつく電波が…

おっと、いけねえ！またメタ発言か

それにしてもこの部屋広いな、そして俺は眼帯を付けている、何故かって？それはだな…俺がオッドアイで生まれてきたからだよ…、でもこの家のヴァリエール侯爵と、ヴァリエール夫人は、俺を見捨てなかつた、ただし、俺は10歳になったら領地が与えられるという話を聞いた、理由はエレオノール姉さんが俺のことを考えて言つたらしい、まあ俺はそうは思わないがな。

まあとにかく俺は魔法が使えるか試してみたが、まだ駄目だ、こつちでは先住魔法として扱われる火竜の魔法や、マスターの妖精の法律ロウ フェアリーグリッターや妖精の輝き、また失われた魔法の時のアーク、具現のアーク、大樹のアークも使えない…まあ後々使えるだろうが、まあとにかく俺はこの転生生活を大事にしよう…

まあ俺はさっきの都市から5年たった。え？なんで飛ばしたかつて？転生前のあの年のままの心で、哺乳瓶などがないこっちの世界は、羞恥プレイだけで死ねる、まあ思春期真っ盛りのエロ男子だったらうれしいだろうが、あいにく俺の思春期はもう終わっていた

さて俺とルイズはもう本格的な魔法の授業を受けているのだが、この眼帯凄いい！だって大天使がくれた具現のアークで、一回作っただが、眼帯を付けてても両目で見ることができるし、すごすぎ！大天使に感謝だな！

さてそれにしても俺が先住魔法が使えることを知っているのはルイ

ズだけつてところはいいな、何故ばれたかつていうのは、俺がマン
トを杖もなしに作っていたからだ、まあルイズには虚無の魔法だか
ら黙っておいてほしいと言っておいた、まあこれも言いなおしてみ
れば神の創造の力みたいなものだもんな

「さてライル様、ルイズ様、今日はファイアボールを教えたいと思
います」

「ふあいあーぼーる？おにいちゃんなにかわかる？」

「さあな？俺も知らない」

ルイズにお兄ちゃんと呼ばれるなんて言い身分だな…まあそんな話
は置いておいて

ファイアボール
火の玉…杖から火の玉を出す魔法、まあ簡単に言つとドラクエのメ
ラだな

「ではやってみましょう…ファイアボール！！」

そう先生が言つと杖の先に炎の球体が現れ、飛んで行った

「では二人とも、やってみましょう」

「はい…ファイアボール！」

そう俺が言つと、樹の杖の先から炎の球体が出てきて飛んだ、しか
しルイズのほうは小っちゃい炎が出てすぐに消えた

「ほう、ライル様は初めてではありますが良い調子ですね、ルイズ

様はもう少し頑張ればうまくいくはずです」

そういつてルイズを励ます先生

その日俺は魔法が成功したいいい気分と、あと5年でこの家を去る悲しい気分に浸りながら寝た…

次の日、俺はカトレア姉さんと遊んだ、しかしこれのせいで病気が悪化し、俺は10歳になる前に、家を追い出された、この追い出された日は、カトレア姉さんの病気が悪化して一ヶ月後だった、この時ルイズは俺が死んだと聞かされていたらしい、そういう話を聞いて俺は名前を変えた…

ライル・インファニオ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールから

レイン・アルファニオ・ル・ブラッド・デ・ア・メサトリアに…

そして俺は、ヴァリエール家の領地から出て、俺の領地、メサトリアにたどりついて、そこで、過ごした、

途中で、親父が来て、母親や、姉貴たちには内緒で俺を、原作に出てくる、学園に入学させてもらったのだ…

そしてこの事件から早くも11年の時が立った……………

第2話 ルイズの兄の使い魔

さて俺は今原作の最初の使い魔召喚の儀式のイベントを行っている

「この宇宙のどこかにいる我に使えし使い魔よ、5つのフォースの境目をくぐって今ここに現れよ!!」

そう俺が唱えると蒼白い魔法陣が現れて銀の竜が現れた、いや違うな、リオレウス希少種、別名：銀火竜でもな出こいつが召喚されたんだ？モンハンの世界とかぶってるだろ、しかもほぼ最強の飛竜だし…

「おお、ミスタ・メサトリアは銀の竜を呼び出したんですか？」

「はい」

「フム…この竜は火竜の上级クラスですね…では契約を」

そう先生に言われると俺は呪文を唱え始めた

「我が名はレイン・アルファニオ・ル・ブラッド・デ・ア・メサトリア、五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

そついつてリオレウス希少種に口づけをし契約をした

「それにしても、この竜は珍しい竜ですね、始祖プリミルの乗っていたという伝承の竜にそっくりです」

「そうなんですか？」

「ええ、この伝承には付け足して《始祖ブリミル、銀火竜にまたがり始祖の4体の使い魔とともに移動した》と書かれていたと思います」

「マジか！ー俺がいることによる補正か！？このあと俺は授業をさぼった、まあ先生に入っただし…」

「リオレウス希少種は小っちゃくすれば入るからよかったぜ」

そう、こいつの大きさは召喚時から小さかったからよかった、まあ大きくもなるかな

「それにしてもこいつは、喋れるか？」

「何か言ったか？主人」
マスター

「ほう、お前は喋れるのか？」

「まあね、でもありがとよ主人、あんたのおかげで古龍に殺されずに済んだ」

「そうなのか？まあ一応礼は受け取っておくよ」

「それにしても、主人はどんな魔法が使えるんだ？ココは魔法の世
界なんだろう？」

「ああ、俺はまあ先住魔法などがあるな」

『そうなのか…まあ主人は俺の恩人ってことに変わりはない、助かった』

「そうか？まあいいだろう、お前のこと少し小さくするからな」

『お、おう』

そう言葉を交わすと俺は立って、リオレウス希少種のリオに向かってこう唱えた

「ミニマム！！」

するとリオは普通のキュルケの使い魔の少し大きいぐらいの大きさになった

「さて、アイツのどこに行くか…お前も来るか？リオ」

『ああ、あいつって誰だ？』

そりゃあ決まってるだろ…

「妹と、彼女様のところにだよ！」

第2話 ルイズの兄の使い魔（後書き）

今回凄く短くて済みません、なるべく2日の間に投稿します

第3話 ルイズの兄の妹と彼女

さて俺は今ルイズの部屋の前にいるんだが…
中から才人らしき人の悲鳴が聞こえる…やばくねえか？

「さっさと入って助けてやるか…」

そういつて俺はドアをノックする…返事がない
となると……

「『しょうがないなあ…』 『まあ、ノックしても出なかったんだし…』 『何か言われても僕は、悪くない』」

そうつぶやいてドアに向かってプラス螺子を投げつけドアを破壊する
すると轟音が響いていきそうだったので壊した時に出る音の音量を
なかったことにした

ちなみの何故俺が球磨川先輩の『オールフィクション大嘘吐き』をもっているかという
と『具現のアーク』を使って『ブックメーカー却本作り』と一緒に応用して作った
のだ

「何よ一体……お兄ちゃん？」

「ん？なんだお前は、兄の顔も忘れたのか？だからゼロ、ゼロって
呼ばれるんだ…まあそういうやつは本当にゼロなんだが…元気だっ
たか？ルイズ」

「え？お兄ちゃん？え…でもなんで？えレオノールお姉さまは死ん
だって言っていたのに」

「あのくそ姉貴が本当のこと言うと思ってるのか？俺はあいつがカト姉が病気になった件についてのことで家追い出されたんだぞ」

「そうなんだ…生きててよかった」

いや、泣いて言われても…俺の理性が壊れそう…いや、ダメだここで壊れたら、アイツに何て言えばいいかわからない

「まあその話はここまでにして…お前、この男子に何してたんだ？」

「ああ、サイトのこと？ただ単にゼロ、ゼロ言うからお仕置きしたのよ／＼／＼／」

そういつて顔を赤らめながら《ぶー》という擬音が聞こえそうな可愛い格好をしてきた

「まあそれなら、今回はいいんじゃないか？言うておくが平民だからと言って苛めるなよ平民でも、俺ら貴族のために働いてくれるんだ、前も行ったが俺たちは平民の人たちが働いてくれるから過ごせるんだ、良いな？」

「うん…」

「じゃあ俺はこのドアもろともこの部屋を治すから…」行くよ『」

そういつて俺は腕をかざし

「『それでは皆さんご唱和ください…It All Fiction
！…』」

そう俺が叫ぶと部屋が元通りに戻った

「じゃあ俺は行くから…移動距離間^{ワーピングポイント}」

そういうと俺はルイズの部屋から姿を消した

「さて次は彼女さんのところにだが…」

え？さつきから彼女彼女言ってるけどだれかって？

「2年ぶりに会ったよなあ…元気かなあ…タバサ」

そういつて俺はタバサの部屋にノックして入った

第3話 ルイズの兄の妹と彼女（後書き）

すいません今年の投稿はこれで終わりそうです。

すいませんどうかゆるし… あ、石を投げるのだけは！？

あと3日前に約束していた登校日に投稿できなくてすいません…

次回もお楽しみに！

そしてよいお年を！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5977z/>

ゼロの使い魔～ルイズの双子の兄貴に転生しました～

2011年12月30日23時48分発行